

大学教育再生加速プログラム(AP) 事後評価結果

整理番号	31	大学等名	京都外国語大学
テーマ	テーマⅠ・Ⅱ複合型		

（「大学教育再生加速プログラム委員会」による評価）

【総括評価】

A：計画どおりの取組が行われ、成果が得られていることから、本事業の目的を達成できたと評価できる。

【コメント】

大学改革の加速については、「反転授業型アクティブ・ラーニング」の大きな進化、当該大学の強みである語学力に加え、社会で通用する人材への育成を目指し、独自の9つの能力を軸に学修状況把握のためのシステムの拡充についても、本事業の実施による大きな成果であると評価できる。今後は、平成29年度に設置された「コミュニティ・エンゲージメントセンター」などの組織の活性化を通じ、大学改革を永続的に加速させていくことを期待する。

事業の具体的な取組の進捗状況については、年度ごとに取組を強化し確実に成果に結びつけるとともに、特に外国語大学の生命線とも言える語学力強化においては、TOEIC平均スコア上昇等、数値的にも大きな進展が見られたことは評価できる。一方、独自の取組として注視した「サーバントリーダー」の育成に向けては、プログラムへの参加者数が補助期間中の全ての年度において目標値を達成できなかったことは残念であったが、国際貢献学部のカリキュラムへ発展的に移行されたことから、継続的な推進が期待される。また、平成27年度以降に毎年計上された特任教員雇用に関する人件費については、補助期間終了後どのように対応されるのか、学内でもしっかりと確認・検証されることが望まれる。

事業の定着に向けた実施体制及び継続のための取組状況については、特に教員の自己評価は注目すべき取組であり評価できる。この施行にあたっては、目標管理の明確化なくしてスムーズな運用はあり得ず、重要な取組であるだけに継続的かつ発展的な取組が期待される。一方、評価体制については、蓄積されたデータを全学的に俯瞰し、さらに適切に分析して全学経営やIRに生かすことが課題であると考えられる。分析力強化のためにIRを専門とする教員の配置されていることから、今後の評価体制の強化が期待される。

事業成果の普及については、今般の新型コロナウイルス感染拡大等の影響もあり、グローバル化の在り方についても変化が起こることは避けられないことが予想され、これに伴い大学におけるグローバル化も新しい局面を迎えるものと考えられる。この時代にあって、当該大学が述べる「外国語の専門的教育のみならず、広く大学における語学教育の進展に寄与すること」がまさしく求められる役割であると考えられ、一層の積極的な発信が期待される。

全体を通して、教育方法の開発・改善、成果・効果の可視化及び検証の枠組みの構築、学修支援体制の整備等、大学改革を総合的に展開されてきたことは評価に値する。当該大学の更なる発展が期待される。